

団塊世代による
地域づくり

団塊の世代と
「立教セカンドステージ大学」

— 学びの情熱尽きることなく —

立教大学



池袋キャンパス

同窓会の会話から

ある雑誌で「五〇歳を過ぎると高校や大学のクラス会や同窓会がふえる」というエッセイを読む機会がありました。その時は、あまり気にも止めませんでした。五〇歳を過ぎたらこの種の案内が頻繁に届くようになり、本当にびっくりしました。おそらく、このくらいの年齢になると職場でも多少、余裕が生まれるだけでなく、人生の先が見えるようになり、そうすると過去が懐かしくなるのかもしれない。

クラス会や同窓会では、仲間の近況から話が始まり、最後は健康問題

と定年後の話になるのが一般的でした。「定年後はどうしようかな」ということですが、「家内に迷惑をかけたので、一緒に温泉にでも行つてのんびりしたい」とか「海外旅行でループル美術館へ行ってみたい」といったレベルの会話が終わってしまつたような気がします。

現実には、毎月温泉に行つたり、毎年海外旅行など行けるはずがありません。まだ、本当の意味で自分の老後をリアリティーをもって考えてはいないということかもしれません。この世代のかたりの人たちが、定年後も子会社や関連会社で嘱託といった形で働き続けることを希望し

ているかと思えます。しかし、現実には、特別な趣味をもつていたり、働きながらNPOやNGO、そして地域の街づくりに参加していく人たちは少数派で、ほとんどの人たちが定年後自らの居場所も見出せず、平凡な日常性を二〇年以上生きていかねばならないということになるのではないのでしょうか。

「二〇〇七年問題」と団塊世代

団塊世代の定年が二〇〇七年からスタートし、福祉・医療だけでなく、あらゆる分野で少子高齢化に伴う諸問題が表面化してきます。それと同時に、最近では「二〇〇七年問題」と

いう言葉をよく耳にします。しかしこのような表現は正確ではないような気がします。正確には「二〇〇七年後問題」であり、二〇〇七年以降、この問題は一年ごとに深刻化していくという性格をもっています。

一般的には団塊の世代は、一九四七年から一九四九年に生まれた戦後の第一次ベビーブーム世代を意味しています。この世代は、高度経済成長期を迎えた一九六〇年代末に高校を卒業していますが、まだ大学進学率が一〇%台後半であり、一九四九年生まれの世代で二〇%数%になっていると記憶しています。この世代の多くが高校卒業後に会社に入り、企業内教育の中で育ち、日本社会の高度成長を支え、そしてバブル崩壊を経験しました。したがって、企業中心の人生で、家庭や地域に接点をあまりもたず人生の大半をすごしてき



学びの教室

た人たちが多いと思います。

「立教セカンドステージ大学」の設立

団塊の世代を中心とするシニア層の人たちは、定年後の二〇〇三〇年、自らのセカンドステージをどのようにしてすすめていこうか。現在、マスコミでは、この世代の退職金が総額で何兆円になるとか、ビジネスクラスの海外旅行が完れ始めたといったように、彼らを消費の対象としてしか見ていないのが問題です。大切なことは、このシニア層が自らのセカンドステージを職縁関係（堺屋太一）ではない人間関係を、家庭や地域で主体的につくっていくことをサポートすることです。

立教大学は、「キリスト教に基づく人格陶冶」を建学の精神として、社会に開かれた教育、研究の場として社会の変化に応じて自己革新を図ってきました。「立教セカンドステージ大学」は、文部科学省認可の大学ではなく、立教大学が提供する生涯学習の場です。団塊世代を中心とするシニア層のために、人文学的教養の修得を基礎とし、「学び直し」と「再チャレンジ」のサポートを日



社会科学系図書館

的とした新たな学びの場として、二〇〇八年四月に開講する予定です。当大学をシニア層の人たちが再び大学に集い、人と人とのネットワーク、地域や社会とのネットワークを形成し、仕事や多様な社会参加の担い手としての、セカンドステージを踏み出すための新しいキャンパスの創造と位置づけています。

当大学の特徴とカリキュラム

本科（二年）のカリキュラムは、
[1]エイジング社会の教養、[2]コミュニケーションデザインとビジネス、[3]セカンドステージ設計の各科目群で構成されます。希望者は更に専攻科（一